

第5回沖縄宣教研究所・富坂キリスト教センター共同研修会 応答③ 外間さんの発題を受けて

川越 弘

発題者への応答として、一つは沖縄の日本キリスト教会の歴史と、二つ目はキリストにあって一つであるということ、三番目に差別され抑圧されて来た者のみが語ることの出来る解放について語って行きたい。

一. 沖縄教会の歴史（民衆との関わりという視点から）

戦後の日本キリスト教会の開拓伝道

1969年10月、第19回日本キリスト教会大会で、渡辺信夫（元東京告白教会牧師）を提案者として9名の牧師・長老が賛成者となり、「沖縄県開拓伝道推進に関する建議案」が可決された。その理由は「沖縄県の同胞に対する負い目を果たすために、日本キリスト教会は、沖縄開拓伝道を開始することを建議する」である。

沖縄伝道に目覚めた背後には、靖国問題の闘いがあった。これは教会の戦争責任の闘いであり、教会の国家権力からの独立という信仰告白の闘いであることが自覚させられて、沖縄の歴史における教会と民衆への罪責を呼び起こすものであった。

沖縄の教会に対する責任は、当時の藤田治芽（元福岡城南教会牧師）の言葉から判断できる。「日本基督教会は今よりもっと早く、沖縄の主にある友らとの交わりを回復すべきであった。この時を外しては、彼の地の兄弟に対して申し訳ないのみならず、過去において日本基督教会に仕えた先輩に対しても真に恥ずかしい。沖縄開拓伝道にあたって第一に考えることは、使命を負う伝道者である。沖縄の人々は誠実であるため、伝道者がどんな志を持っているか判断する能力を備えている。ヤマトではごまかしがきくが、ウチナーではごまかしがきかない。そのために、職業的な伝道者、一時の腰掛け的な説教者には御言葉を聞こうとしないであろう」と記している。

戦前の沖縄の日本基督教会

日本基督教会の沖縄伝道は、1912年（明治45年）、琉球王族出身の伊江朝貞が

東京の富士見町教会で、植村正久の説教を聞いて回心したことから始まった。

1922年（大正11年）、芹沢浩牧師は植村正久の強い勧めによって那覇教会に赴任し、1931年（昭和6年）、那覇市久米町に教会堂を建設した。芹沢は、沖縄の人々の精神状態が酒と辻遊廓で減びると警告し、沖縄が独立できない最大の原因は、日本政府が皇室神道を県民に押し付けているからだと言った。彼は、闘病生活から臨終に至るまで、青年会・婦人会員を激励したと伝えられている。

その後、日本基督教会は、那覇・首里・八重山・名護・具志頭（ぐしちゃん）の5教会となり、沖縄の諸教会の中核的存在となった。

琉球処分以来、帝国日本の支配下では、苦難や理不尽が日常的にあった。キリストの福音がそこからの解放や救済があったからこそ、この地域に根強く広がったと考えられる。それでも、芹沢浩牧師のもとに集まってきた人々は、県の管理職や教育者や医者などという日本帝国主義の下で沖縄を管理し指導する立場に立つ日本人信徒が多かった。その教会では、日本に懂れている沖縄の信徒がいたと言われている。

沖縄コンプレックス

1944年10・10大空襲以後、日本軍の命令で日本人と多くの沖縄の人々が本土に疎開した。牧師もその中にいた。1933（昭和8）年、那覇教会の牧師となり、その後名護に伝道し、ライ患者救済に心血を注いで沖縄救癩協会を設立した服部団次郎も、疎開者の引率者として九州に疎開した。

「服部牧師は、疎開先の彼の胸のなかには、戦火の中に自分が残してきた教会や、ハンセン病患者たちのことが激しくあったに違いない。戦争直後の沖縄の教会には牧師がほとんどおらず、生き延びた僅かの信徒たちを中心として戦後教会史が語られる中で、『本土出身の牧師たちは沖縄の教会を捨てた』という批判が、彼の心の奥に沖縄コンプレックスとして潜んでいたに違いない。彼は『自分が再出発する中に、沖縄につながる本当の生き方を見出すことができるのではないか』とも書いている。貧困と窮乏と激しい労働の中で、愛児2名を病気で失ったほどの炭鉱夫生活は、服部牧師にとっては沖縄へのお詫びの生活であったと解釈しているのかも知れない」（『連帯と尊厳を ある炭鉱伝道者の半生』の巻末「服部団次郎牧師に寄せて 平良修記」）

沖縄の教会の戦後責任

1945年4～6月の沖縄戦は、天皇制国体護持の「捨て石」作戦として唯一の地

上戦を行った。沖縄の民衆は、日本軍の壁として奴隷か家畜のように扱われて、戦争の地獄を経験した。「鬼畜米英に殺されるよりは、お国（天皇）のために死ぬことが崇高な生き方だ」と、日本の軍隊から教育を受けて地獄のような戦争を経験した。それでも軍国教育を受け思い込ませられて悲しくも痛々しい被害を受けたとしても、積極的に戦争を肯定した沖縄の人々の責任、とくに沖縄のキリスト教徒は、神から問われなければならない。

戦後の沖縄教会の出発

戦後最初の礼拝は、1945年4月、島袋の捕虜収容所において、アメリカの従軍付き牧師の指導のもとで信徒によって行われた。

米国海軍は、沖縄住民を保護し、日本軍の支配から救出する一環として戦った。そこにはファシズムからの解放を演出する意識もあった。彼らは本国以上のデモクラシーを沖縄で実現しようという夢を抱いて、キリスト教宣教に託したのであった。

1945年8月20日、米軍政府は15名の「沖縄諮詢（しじゅん）委員会」（5名はキリスト教と関わる）という諮問機関を作り、「沖縄人の声を聞くことのできる」政治体制をつくることを住民代表（諮詢会）に明言された。委員長は志喜屋孝信（しきやこうしん）であった。志喜屋は、広島高等師範学校在学中に、キリスト教の無教会派の集會に参加していた経歴があった。彼はその後沖縄民政府の知事についた。沖縄民政府は、米軍政府の意志を住民に伝えるもので決定権はなかった。それでも志喜屋孝信は、すでにその時において、沖縄の独立と自立を目指していたことは特筆すべきことである。

琉球政府文化部と「沖縄基督聯盟」

琉球政府の中核的存在は、文化部（指導員23名の12名がキリスト教徒）であった。沖縄民政府文化部は、新しい沖縄を建設する運動の中心となった。文化部長は当山正堅であった。彼は日本基督教会那覇教会長老で、諮詢委員であった。

米国民政府は強い要望をもって、超教派の「沖縄基督聯盟」を結成させた。理事長の当山正堅は、キリスト教をもって新しい沖縄を復興しようと尽力を注ぎ、伝道集會や日曜礼拝などを沖縄島各地で定期的で開催した。ここから、仏教界からは「政教分離」に違反するという批判が起こった。「沖縄基督教聯盟」は、ハワイや米国在住の沖縄出身者や米国の教会婦人会などから送られてくる大量の救済物資の管理も担い、戦後の沖縄の経済社会復興にとってなくてはならない存在になっ

た。ところが1948年ごろになると、救援物資の分配をめぐる不満が生じて来た。

陸軍軍政の上意下達強権支配

1947年10月、象徴天皇ヒロヒトは「主権を日本に残したまま沖縄の土地を長期租借する」というメッセージを米国政府に伝えた。さらに1948年に朝鮮戦争が勃発し、米国とソ連の冷戦構造が構築されると、沖縄の軍事基地が必要とされ、沖縄戦を体験した米兵が帰還させられ、戦争を経験しない米陸軍が沖縄に移管した。「政治に幼稚」な陸軍軍政は、沖縄民衆を制圧し、上意下達の強権支配をして、住民を奴隷か家畜のように扱った。米軍人の自由勝手気ままな行動は無法状態で、住民への犯罪は日常茶飯事であった。

この時代の沖縄の新聞記事には、米国人の「善行」や、「美談」が繰り返し報道された。アメリカ占領軍は、米軍基地が沖縄に被害と損害を与える側面を隠蔽し、米軍と米国のキリスト教が沖縄の人々に恩恵を与えているというイメージを強調し、多くの沖縄の教会も米軍の宣撫工作に手を貸した。

米軍政府の土地収奪

1952(昭和27)年11月、米国民政府は軍用地土地賃貸契約「契約権」を交付し、9坪でコーラー本程度の借地料で20年使用を要求したため、地主たちは応じなかった。1953(昭和28)年、米国民政府は「土地収用令」を交付し、「契約が成立しなくても土地使用が可能」とし、銃剣とブルドーザーによって土地を収奪した。

沖縄民衆の抵抗運動

1954年、沖縄の民衆は、「軍用地処理に関する請願」を全会一致で決議した。「土地を守る4原則」は、1. 地代の一括払い反対。2. 使用中の土地について適正な補償をする。3. 米軍から受けた損害の賠償を要求する。4. 新しい土地接収に反対する。沖縄の民衆は命がけで「この4原則」を守った。

…この「民衆の野生のデモクラシー」は、終戦直後のキリスト福音の蒔いた種がこのような形で芽を吹き出したと、私は考えたい…

阿波根昌鴻は沖縄の教会に支援と援助を求めたが教会は沈黙

アメリカ軍の無法な土地接収に反対したのはキリスト者の阿波根昌鴻などであった。彼は1955年7月から、沖縄本島で非暴力による「乞食行進」を行った。キリ

スト教会に支援と援助を求めたが、教会は沈黙して手を貸そうとはしなかった。

ベル宣教師の働き

ベル宣教師は、1953年12月、米兵が銃剣とブルドーザーで農民を排除する光景を目にし、米軍の横暴さに衝撃を受け、1954年1月、米雑誌『クリスチャン・センチュリー』に米軍批判記事を投稿した。この記事が国際人権連盟議長の目に留まって、沖縄の現状が世界に初めて広まり、日本国内では「朝日報道」と呼ばれる沖縄問題報道キャンペーンがスタートした。

「神よ、願わくは新高等弁務官最後の弁務官となるように」

キリスト教を通じて行われた宣撫工作は、米ソ冷戦の高まりとともに次第に露骨になってきた。1960年のベトナム戦争の激化によって、基地への批判が沖縄民衆の間で大きくなった時、米政府は沖縄の牧師たちを招待して「米軍が沖縄や日本を守っていることを、あなた方の口から沖縄の住民に伝えて欲しい」と要求した。ここから数名の牧師たちは、「自分たちは米軍に利用されている」と悟り、教会外の人々と手を結んで基地反対闘争に参加して行くようになった。

その象徴的出来事が、1966年11月2日のアンガー高等弁務官就任式での平良修牧師の祈祷であった。平良牧師は「神よ、願わくは新高等弁務官が最後の弁務官となるように」と祈った。この祈りを通して、沖縄の人々の間で高まりつつあった「祖国復帰運動」に呼応した。

まとめ

沖縄民衆の自立という関わりという視点から教会の歴史をざっと概観すると、まず一つは、沖縄戦において沖縄の人々が帝国日本の軍政と天皇の犠牲となって来たことに強い怒りを持たねばならない。しかし、そうであっても皇国史観の教育を受けて、「鬼畜米英」と思い込ませられ、自ら積極的に戦争をした責任が沖縄にある。とくに沖縄の教会は神から問われるべきであろう。

終戦直後、荒廃した沖縄を建て直すために、米軍政府からの援助を受けてきたことに深く感謝をしなければならないし、キリスト教をもって沖縄を建て上げようとした精神を尊ばねばならない。ここから沖縄の人々の土地闘争という自立心が芽生えてきたのではないか。そこに着目をしたい。

それでもその後の多くの教会は、米国民政府の支配と基地問題への宣撫工作に

手を貸して来たことや、米国民政府による土地強奪の不当性に沖縄の民衆が命懸けで闘ってきたことに無関心であったり、日本政府によって沖縄の人権が差別されている中で、教会が沖縄の自立心を建て上げることに怠ってきたことを、厳しく問わなければならない。

戦前の日本基督教会は、帝国日本政府の支配下で味わう苦難や理不尽が日常的にあった沖縄の人々に、愛をもって伝道に命をかけて人々に生きる喜びを与えて来たと言われている。しかしそれでも、帝国日本政府の国策に乗じていた立場にあったことは否めない。その結果として、沖縄の人々を差別している側に立っていたと言わなければならない。戦後の教会においても、日本が今も変わらず沖縄を差別している以上、日本の歴史に責任を持って生きている立場であるために、沖縄に対する日本の罪責において、日本人として一層厳しく悔い改めをもって宣教（説教）に励まなければならない。

二．キリストにあって一つ

パウロは「もはや、ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからである」（ガラテヤ3：28）と語っている。「キリストによって一つである」ということは、両者溶け合って混ざり合うことではない。両者は別々であって、それぞれが独立しているから一つとなるのである。このことは三位一体の神の論理、「真の神にして真の人である」（カルケドン）キリストの論理から示される。聖書はすべてこの論理によって書かれている。日本人と沖縄の人は、それぞれ異なる歴史の上に立っている。日本人は、日本の歴史に目が開かれて、日本の罪責の歴史に責任をもたねばならない。日本のキリスト者は、日本の教会の戦争責任に真実をもって償うことである。心の中に浸透している天皇教信仰という偶像崇拜と闘って、償いの生き方をするように召されている。沖縄の人々の痛みと悲しみの7を70倍するまで、いやそれ以上の「負い目の精神」を持つことである。これをキリストの十字架として担う時、聖霊が助けてくださるであろう。沖縄のキリスト者は沖縄の歴史を担うことであろう。ウチナンチュウとしてのアイディンテテイ、命（ぬち）どう宝の魂、沖縄に生まれ育った者として誇りを持つことである。そして差別している日本人を厳しく怒らなければならない。日本人はこれを神の怒りとして受け取るべきである。ここからでしか、キリストによって「私たち二つのものを一つのもの」にすることが出来ない」（エフェソ2：14）と考える。

三. 差別され抑圧されて来た者でしか築き上げられない真の解放

日本の教会は、真実を語って行動した敗北の経験が少ない

戦前、「バルメン宣言」を日本に最初に紹介したのは、山本和である。彼は「日本基督教団より大東亜共栄圏に在る基督教徒に送る書翰」をアジア諸の教会に送付した。その内容は、キリスト者は天皇制に服属して八紘一宇の精神を踏襲することによって、キリスト教が世界に広まるという日本のキリスト教であった。ナチスに抵抗したドイツ福音主義教会の神学的宣言である「バルメン宣言」とは似ても似つかぬ内容である。むしろ180度かけ離れている。どうしてそうなのか。日本の神学界は机上の論理で終始するからであろう。現実には、信仰の闘いをして来なかったのではないか。西欧教会の歴史の中で数知れない信仰告白の闘いの挫折を味わってきた結果、「バルメン宣言」が立ち上げられたことを考えると、日本の教会には信仰の闘いをして挫折を味わって来なかった歴史があるからだ、と言えよう。

真実を語って行動して排除されても、敗北ではなく神の勝利である

17世紀のヨーロッパにおいて、教会では血のにじむ政教分離と信教の自由の闘いがあった。迫害を受け、大量の殺害があり、国外に追放された。やがて闘いの核が蒸発すると、それでも政治的、社会的、経済的な価値の残滓が形を止めた。人々は神から離れて無神論になったとしても、近代デモクラシー（基本的人権）の落とし子として残った（E・マクグラス）。こうして「多年の試練に堪へて自由獲得の努力をして来た」（日本国憲法97条）のである。

韓国の民主化運動も、戦前の3.1独立運動、神社参拝拒否活動などが根底にある。幾十倍・幾百倍に渡って日本政府から潰され排除されて挫折しても、真実をもつて闘った歴史があるからこそ、1987年に民主化が形成されたのである。

沖縄の自決権の闘争と辺野古基地反対運動は、基本的人権と地方自治の獲得運動である。排除され追いやられても反対運動をするのは、日本の為政者が、神に立てられた者としてふさわしく公正と正義をもって人民を統治するためである（ローマの信徒への手紙13章1-7節）。排除されて潰されて挫折しても、それは敗北ではない。真実な行動をして潰される行為は、勝利につながる。敗北とは、どんなに運動をしてもダメだと言ってあきらめることである。キリストは神の義に生きてこの世で敗北した。こうしてキリストの義をこの世界に明かにしたために復活して勝利した。そのキリストに倣うことである。

神から賜る幻と夢の宣教

沖縄の宣教には、神から賜る幻と夢がある（使徒言行録2章17節）。使徒の時代には、世界の民衆の叫びがあった。それは民族差別の問題であった。そうした中で「キリストにあって一つ」という異邦人伝道が始まったのである。沖縄には民衆の叫びがある。その叫びにキリストの言葉をもって応える努力をしなければならない。

沖縄は、400年以上に渡って日本から差別を受け、踏みにじられてきており、今もそうである。しかし、差別され、虐げられ、抑圧されている人々の感性を通してからでしか、差別と抑圧から解放される手立てはない。沖縄ではイザヤ書53章4、5節の言葉が生きている。日本が背負わなければならない戦争の罪責を、事実、沖縄が受けて痛み悩んでいるからだ。日本の罪悪性によって、沖縄が打たれて苦しんでいる。日本が神に背いたために、沖縄が刺し貫かれ、日本の咎のために沖縄が打ち砕かれている。しかし、沖縄の受けた懲らしめによって世界に平和が与えられ、沖縄の受けた傷によって世界の人々がいやされるといふ希望が与えられている。その希望は、差別と抑圧を受けている人々から起こされるのである。差別と抑圧を受けている人々から新しい世界が広げられて行くのである。このキリストの視点に立ち、キリストに倣って行動するとき、沖縄が差別を受ければ受けるほど、どの民族よりも崇高な賜物を神から賜り、その賜物が蓄積されている。それを十字架として沖縄の教会が担うことではないだろうか。

今やアジア民衆の声が高まっている。国家や政治を超えた民衆による生活圏共同体を形成する時が来ている。国内では、在日コリアンの問題、部落の問題、在日アジア人の問題、アイヌ人の問題、女性差別の問題、ジェンダー等の人権問題と原発問題と自然形態の問題がある。沖縄の教会は、アジアと日本国内のこれらの問題と闘っている人々と連帯して、人権回復運動の中核的存在となる役割が与えられているのではないだろうか。

〈参考文献〉

「沖縄キリスト教史」排除と容認の軌跡 石川政秀 いのちのことば社、「沖縄キリスト教資料」（沖縄キリスト教協議会）、「この後の者にも／連帯と尊厳を…ある炭鉱伝道者の半生」服部団次郎 キリスト新聞社、「服部団次郎牧師に寄せて」平良修、「沖縄伝道所20年の記録」日本キリスト教会沖縄伝道所、「日本キリスト教会50年史」日本キリスト教会歴史編纂委員会、「沖縄理解のための方法と課題」（一色哲「福音と世界」2005年12月号）、「一色哲「沖縄キリスト教の歩み」NHKラジオ、オーティス・W・ベル2世（Otis W. Bell II）文書、「沖縄戦後民衆史」森宜雄、「カルヴァンの生涯」（E・マクグラス）